

李通玄における文殊菩薩の思想と周易思想との交流

小 島 岱 山

序

李通玄の思想は教体論としては三聖円融と一真法界を根本とし、宗趣論としては理智行を根本とする思想であると要約できよう。この立場から『華嚴経』を眺めた時、最も注目すべき菩薩のひとつとして文殊菩薩を上げることができる。本論文では『華嚴経』における文殊菩薩の思想が中国固有の思想である周易思想と如何なる形で交流しているか、その様相の一端を李通玄の著作を通じて論究することにした。

東北方清涼山の文殊菩薩

『新華嚴経論』（以下『新論』と略称す）巻四に、「何が故に文殊師利を上首と為すとならば、文殊師利を蒙を啓くの主と為す為の故に。十方の諸仏は皆な文殊師利の妙徳を以て信心を発するの首と為すが故に。法身の根本智を彰顯するを以ての故に。常に文殊師利を以て果前の信と為す」（大正三六、七四五上）とあり、又、『新論』巻三には、「啓蒙発明の首な

るが為の故に小男と為す」（大正三六、七三九上）とあり、さらに『新論』巻四には、「又、文殊が東北方の清涼山に居するとは、艮の卦が東北方を主るに像るが故に。艮を小男と為し、童蒙と為す。文殊は常に凡夫を化して蒙を啓きて見性せしめ及び本智の初首なるが為の故に」（大正三六、七四五中）とある。

文殊菩薩は東北方の清涼山に止住していること、又、啓蒙の主であり、信心を発するの首であるということから、李通玄は『周易』『説卦伝』中の、「艮は東北の卦なり」「艮は三索して男を得、故に少男と謂う」という文を援用して、自己の文殊理解をより闡明なものにしようとしたのである。

艮の卦を童蒙と為すというのは李通玄の独創である。少（小）男とは末子のこと、蒙を啓いて行く順序が長男より後であるから、先に蒙を啓く体験をしている長男を果後の行人としての普賢菩薩に当て、遅れて蒙を啓く末子（少男）を果前の信人としての文殊菩薩に相当させたのである。

さらに文殊菩薩の止住する東北方について検討してみると、『新論』巻三に、「東北方を主るを艮の卦と為す。艮を小男と為し、又、山と為し、石と為す。丑寅の両間に在るは、平旦の創明には暗相已に無きも日光の未だ著われざるを表す。啓蒙の首と十住の発心に創めて道を見るに像る」（大正三六、七三九上）とあり、又、『新論』巻十四には、「法を表わさば、東北は是れ艮の卦なるを明す。艮を小男と為し、童蒙と為す。丑寅の間は是れ初明なるが故に、文殊師利に像る。常に凡夫が正信に入り、及び初めて道を見るの童蒙をして妙慧を明らかに生ぜしむるを發起するを以ての故に。又、山の頂に踞り、相の尽る処に至るが如きが故に。初めて正信に入るが如き者は創めて諸法の空なることを信するを明すが故に。能く法空を信すれば妙慧生ずるが故に。丑は初信の如きを以て、寅は初めて道を証見するが如きを以ての故に」（大正三六、八一四上）とあり、さらに『新論』巻四には、「子を仏位と為し、丑を十信と為し、寅を十住と為し、卯を十行と為し、辰を十向と為し、巳を十地と為し、午を等覺と為し」（大正三六、七四五中）とある。

ここには『周易』の思想のほかに陰陽五行（十二支と方位）の思想との交流も見られる。十二支と方位とで言えば、艮の卦は東北であるので丑と寅の間に艮の卦は位置することになる。文殊菩薩は東北方に止住しているので丑と寅の間に存す

るわけであり、従って十信と十住の間にあって、しかも兩位に關係するものと理解される。

ここに引用された文の範囲で文殊の信の内容を言えば、信とは諸法の空なることを信することである。これは太陽のまだ出現しない時の平旦（夜明け）の明さのごときものである。さらに信の段階が進みその結果として初住の位に於ては文殊は、諸法は空なる存在であるとの妙慧を体解証得することになる。これは太陽が出現して、道をはっきりと見ることができるとき状態のことである。

文殊菩薩は十信位においては正信の初首、啓蒙発明の初首であり、十住の初心においては法身無相の妙慧を体解証得する菩薩のことであることがわかる。法身無相の妙慧とは、善能く邪正を簡択する法身無相の妙慧とも言われ、空觀に裏打ちされた分別心、即ち無分別の分別心のことであると言える。法身無相の妙慧とは文殊師利の本質的性能を表わす言葉である。

なお引用文中に、文殊は法身の根本智を彰顯すとか、本智の初首なるが故にとかあるが、文殊は根本智（毘盧遮那仏）の体であるので、この引用文の意味は、文殊は根本智（本智）を初信の段階より顕わし出して行く菩薩という意味である。したがって李通玄は時には文殊と毘盧遮那仏とを同一視して、文殊のことを法身無相の根本智と呼ぶこともある。ちな

みに、十信位中の根本智の体を特に不動智と言う。さらに、引用文中に、「山と為し、石と為す」とあるが、これは『周易』『説卦伝』の「艮を山と為し、徑路と為し、小石と為し」の文に基づく。

東方金色世界の文殊菩薩

十信の位は『八十華嚴經』の第二会、普光法堂会の六品の經、即ち「如来名号品」「四諦品」「光明覺品」「菩薩問明品」「淨行品」「賢首品」の中に説かれている。この六品の經の中心的役割を演じている菩薩が文殊菩薩であり、經の中では東方の金色世界に止住していることになっている。この意味では十信の位の文殊師利は東方の方位の菩薩として勘案されるべきであるが、文殊は「菩薩住処品」には東北方に止住するとあり、又、『周易』の艮の卦の内容と十信の位の文殊の性質とが偶然ではあるが一致していること、さらには又、李通玄は普賢菩薩は東方に止住していると見做していること等から、十信位の文殊についても東北方の位の菩薩として李通玄は取り扱ったのである。

しかしながら第二会の文殊は東方の金色世界に止住していることも又事実であり、このことについては、『新論』巻四に、「文殊師利と同じく東方に在りとは、法身智身、理事、体用は本より自ずから一なるが為の故に、本より無二なるが故に」（大正三六、七四五中）とあり、又、「普賢と俱に東方に

李通玄における文殊菩薩の思想と周易思想との交流（小島）

在りとは、東方は卯の位なり。卯を震の卦と為す。震を長男と為す。又、日が出づれば東方は春陽にして明を発し、物として生ぜざるは無く、物として照さざるは無きに像る。理智双つながら徹して体は一にして無二なるを表わす」（大正三六、七四五中）とある。

文殊が本来普賢の止住する方位とされている東方にも存するのは、理智、理事、体用の無二なることを言い表わさんがためであり、あくまでも普賢とともにあるという点でのみ文殊も東方の方位に位置するものと李通玄は理解している。

なお東方は震の卦であるが『周易』『説卦伝』には、「震を雷と為し、竜と為し、玄黄と為し、剪よ（花の通名、震は季節では春だから）と為し、大塗だいと（大路のこと）で万物の初めて生ずる路」と為し、長子と為し」とあることから引用文の「日が出づれば東方は春陽にして明を発し、物として生ぜざるは無く」の文となったと思われるが、「発明」と、前述した「啓蒙」との間には一脈通ずるものがあり、このことなども普賢と文殊との無二なる有り様を象徴している表現と言えよう。

1 『周易』の原文は、本田清『易』（新訂中国古典選、朝日新聞社）のテキストが優れている。唐代の李通玄が見た『周易』に最も近い。

2 『新論』巻四に、「普賢菩薩は常に東方宝威徳上王仏の所に居す」（大正三六、七四五上）とある。

（華嚴学研究所主任研究員）